

昭和二十四年七月二十三日 第三種郵便物認可
 昭和五十六年一月十五日 発行(毎月一回・十五日発行)

(通卷三七九号)

慈

光

第三十三卷 第一号

次

如 来 の 御 心……………近角常観…(1)

晚 年 の 親 鸞 聖 人……………福島政雄…(5)

◎ 御一代記聞書抄(続・一五)……………井上善右工門…(11)

凡骨日誌抄(1) 宿養をせしと身如也……………西元宗助…(14)

死の宣告を受けて……………安波勲八…(16)

念 仏 詩 抄……………木村無相…(18)

心に刻まれた法語……………花田正夫…(21)

— 新年を迎えて —

如来の御心

近角常観

我等罪惡の深きを自覚せざるは、如来の御心を知らざるが故なり。我等歡喜感謝の念のとほしきも如来の御心を知らざるが故なり。人皆思うに、如来の御心は悪しき者でも助けんとおの思召なりと。すでに悪しき者でも、という。如来は悪しき者でも助けたまう、しかれども善きに過ぎたることはなしと。ここにおいて知らず識らず、自ら善人となりずまして、我等が罪惡を自覚せざるなり。而して我等は遂に善人たるあたわず、終に罪惡の避くべからざるに至るや、またおもえらく、悪しき者でもたすけたまうと、あたかも惡を寛容されたる如く感じ、曰く此の如き者でも助けたまうと、知らず識らずの間に如来の御心は我等を目的としたまうことを忘れて、自ら相伴（しようばん）の末席にあるが如くす。かくの如く本願の正意、我等がためなる大慈大悲をおろそかにして、不精不精に如来の救済を仰ぐ、これ歡喜感謝の念とほしきゆえんなり。

如来の御心は悪しき者でも助けんとはならず、悪しき者も助けんとのお誓なり。如来ありて後にたすけんと願あるにあらず、特に悪しき者を助けたまわんために現れたまう如来なり。若し悪しき者を助け得ずんば仏とはなるまじとの誓こそ、そもそも如来の現われたまう源なり。実に我等、罪惡深重の者、たすかるべき筈はなけれども、唯弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて往生を遂ぐるなり、かく信ぜしめたまうも誓願の不思議なり。念仏申さんと思いたつころの起るも誓願不思議なり。人生に若し如来の誓願不思議ましまさずば、五濁惡世の我等いかでか、如来の御名を聞き、御名を信じ、御名を称うることを得べき。

かく如来の御名を信じ称えんとする一念、はや如来の御心は我等が内心に徹到したまいて「そくばくの業を持ちける身にてありけるを、たすけんとお思召したちける本願のか

たじけなきよ」と、罪惡の自覚と共に歡喜感謝の情、湧然として心にあふれてくる。「そくばくの業を持ちける身にてありけるを」嗚呼我等は如何に業深き身よ、罪深き心よ「久遠劫より、いままで流転せる苦惱の旧里はすてがたくいまだ生まれざる安養の浄土はこいしからず候こと、まことによくよく煩惱の強盛に候にこそ」、実に我等は底しれぬ罪を持ちける凡愚なり。しかもかくの如き業を持ちける身にてありけるを助けんとお思召したちける本願のかたじけなきよ。業を持ちける身でも助けんというにあらず、かくの如き業を持ちける身にてありけるを助けんために現われたまう如来とは、いかにもいかにも如来の御心のかたじけなきよ。「願を起したまう本意、悪人成仏のためなり」と聞きしかど、今こそその悪人とは我身なりと知られたり、この我身一人のためたてたまいし本願なり、あらわれたまいし如来なり、名告りたまいし名号なりと知られたり。これ即ち念仏申さんと思いたつころの起る時なり、これ撰取不捨の利益にあずけしめたまうなり。

十方微塵世界の、念仏の衆生をみそなわし撰取してすてざれば、阿弥陀となづけたてまつる如来の御心の知れたる一念、即ち罪惡を自覚せしめたまうなり、その罪惡の者を助けんとおの御心こそ、そもそも如来の現われたまう御本意、現に我等に向いたまう御姿にて

ましましけり。

この如く、如来の御心を頂きたてまつれば、我等はその御心に従いたてまつりて御名を称うる外にせんすべもなし「本願を信ぜんには他の善も要にあらず、念仏にまさるべき善なき故に。惡をもおそるべからず、弥陀の本願をさまたぐるほどの悪なき故に」

ただ何のほからいもなく念仏して、この広大深重の御心を仰ぎたてまつるべきなり。そもそも本願を建てたまう本意、世の戒律をたち得ざる者のために、世の禪定を修し得ざる者のために、無常の風はげしき世の中に、煩惱の泥中に陥れる我等のために、たもち易き、称え易き念仏をあたえたまう御心こそ、選択本願の正意、仏かねてしろしめして我等がために、五劫の思惟、永劫の苦勞を為したまうにありけり。

されば五劫の思惟も、畢竟罪深き我等を助けんところのおこころなり。永劫の修行も罪深き我等をみそなわして助けんところのみこころなり。我等貪欲、瞋恚、愚痴に苦しめるを憐みたまいて、欲覺、瞋覺、害覺を生じたまわず、欲想、瞋想、害想を起したまわず、虚偽詭曲の我等に向つて清淨眞実の御心を廻向し、和顔愛語を以て、意を先にして承問し

たまう。かくの如く永劫の如来の御心の凝りかたまりて遂に正覚を成じたまいし御姿こそ即ち南無阿弥陀仏にてまします。これまことに、仏願の生起本来なり。本願招喚の御声なり、無碍光如来の光明なり、大慈悲のみ親のころなり。

無碍光仏のひかりには 清浄歡喜智慧光

その徳不可思議にして 十方諸有を利益せり

如来無貪のみころより生じて我等が貪欲を対治したまう御姿は清浄光なり、如来無瞋のみころより生じて我等が瞋恚を亡したまう御姿は歡喜光なり、如来無痴のみころより生じて愚痴を照したまう御姿は智慧光なり。

諸仏三業莊嚴して、畢竟平等なることは

衆生虚誑の身口意を、治せんがためとのべたまう

如来八万四千の光明は、我等が八万四千の煩惱を消滅せんがために現れたまう御姿なりけり。聖人曰く

夫れ真仏土を躡わさば、仏は則ちこれ不可思議光如来土はまた無量光明土なり。

と、即ちわれらが悪業煩惱の身を照さんとてあらわれたまいし御身こそすなわち十方無碍光仏でまします。さればこそ我等無明の暗夜に迷えるもの、ひとたびこの如来の光明に遇い、如来のみころに接したてまつるの一念、実に信心歡喜の暁なりけり。和讃に曰く

なるものにあらずや。

かくの如くひとたび如来の御心、我等が煩惱の胸の中に達しなば、知らず識らずの間に功德の大宝海に満足して、口にあふるるのはただ感謝報恩の念仏なりけり。念仏は義なきを義とし、様なきを様とす。かくの如く如来の御心にはかられまいらせて、我等何等のはからいもつきはてて、ただ如来の御名を称え奉る念仏は、念々如来大悲の御心より流れ出でたまうなりけり。これを無碍光如来の撰取選択の本願なればなり。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏。

常音先生の讃歌

このころこれを阿闍世とのたまいて

見捨てじという み慈悲なりしか

よしあしは人にはあらん 大悪の

阿闍世われには よしあしはなし

常観言

常音記

またやりそこない またやりそこない
それだから お見捨てないお慈悲でないか

尽十方の無碍光は、無明のやみをてらしつつ
一念歡喜するひとを、かならず滅度にいたらしむ
と。

嗚呼如来の御姿は、三毒の煩惱をはじめとして八万四千の煩惱の結晶たる我等を照し救わんがためなりけり。さればまた和讃に曰く

無碍光の利益より、威徳広大の信をえて

かならず煩惱の氷とけ すなわち菩提の水となる

罪障功德の体となる 氷と水のごとくにて

氷おおきに氷おおし 障りおおきに徳おおし

と。嗚呼、如来無碍光の春風の如きみころに接し奉りなば、如何なる冷酷なる氷の如き我等が煩惱の塊も、一一和融しきたりて、唯懺悔の涙と共に称名念仏するの外なし。これ如来無碍の御光は、清浄歡喜智慧をはじめとして我等が三毒の煩惱をあわれみたまいて、特にこれを照さんがため威神功德のお姿なればなり。その御光ひとたび我等が煩惱の胸中を照したまう刹那、いかにもよくよく煩惱の強盛に候にこそと、石の如く、鉄の如き氷結せる我等、はじめて罪悪自覚の念を生じたる、これ煩惱の氷解くるものにあらずや。その罪悪自覚の懺悔の涙は即ち如来無碍の御恵みを感じ奉る歡喜の涙なりけり。これ即ち菩提の水と

『光輪』抄

足利浄円

古来聖人の真仏弟子として、そのお生活において感銘せられてあるものに三哉・三徹という言葉がある。「哉」はかなである。悲しい哉、慶しい哉、誠なる哉である。

「徹」は徹底して捨てること、聞いて聞いたという底をすて、信じて信じたという底をすて、慶んで慶んだという底をすて、聞思して聞思したということ皆捨てられた。

聖人の三哉のお言葉を聞思すると、

一、誠なる哉、撰取不捨の真言、超世稀有の正法、聞思して渥慮することなかれ。

二、悲しき哉、愚禿驚、愛欲の広海に沈没し、名利の大山に迷惑して、定聚の数に入ることよるこばず、真証

の証に近づくことをたのしまず、恥ずべし、傷むべし
三、慶しい哉、心を弘誓の仏地に樹て、念を難思の法海に流す。深く如来の矜哀を知りて、まことに師数の恩厚を仰ぐ。慶喜いよいよ至り、至孝いよいよ重し。

といわれてある。聞いたとか、信じたとか、慶んだとかい
うことが、それに囚われたり、執着したりするものでなく、
聞いて聞いたものの底をすて、信じて信じたというものの
底をすて、慶んでもその慶んだということの底をすて居
られる。

晩年の親鸞聖人

福島政雄

四、後序のこと

それからもう一つ、「教行信証」において、人間の問題として、いろいろ考えさせられたのは、後序と申しますか「主上臣下法に背き義に違し忿りをなし、怨みを結ぶ」という、あのお言葉のところでありませう。あの御言葉は、大分問題になった言葉でありまして、大東亜戦争中なんかあの御言葉を大分もじって解釈した方もあるようでありませう。しかし、あの御言葉をそのままなおに受取るというのが、本当なのでありまして、主上も臣下も忿りをなし、怨みを結ぶと言って、主上のことを批判してあるのは怪しからんというて、いろいろもじって解釈した方がありませんけれども、どうでありますか、すなおな心持から考えるところで分ることである。どういふようなことか、私にも人間としての心持の上からどうやら分るようになって参りましたのであります。それやこれやで「教行信証」他にもありますけれども「教行信証」のあちらこちらの御言葉、御心

ております。

これは、よその問題になりますが、ドイツの大哲学者カントという人は、非常に優れた近世の哲学に大革命をもたらしたという、優れた大哲学者でありますけれども、このカントは八十歳まで生きた人でありませうが、惜しいことに極く晩年になってから、すっかり頭の働きの駄目になりました、自分が若い頃から親しくしたお友達が訪ねて来られても、その顔を見て、貴方はどなたでございませうか、ということをお繰返したずね、こちらから名告つても、どうしても思い出して貰えない、というようなことがカントの一生涯を書いたものにあります。それに較べますと、非常な違いであります。晩年になられてから、驚くべき著述をなさるし、そして最後までハッキリした心持でお書きになっている。そうすると、西洋近世の大哲学者に較べて、実に雲泥の相違のある晩年をお送りになっていられます。

五、晩年のこと

「教行信証」の内容につきましては申上げることがほかにありますが、それだけといたしまして、御和讃であります。御和讃を皆さまはどのように感じておいでになりますか。私は何分ヤンチャなところがありますので、若くは、若い頃には、どうも聖人の御和讃はいいんだけれども、これは文学的に見ると、あんまり価値があるとはいえないじ

持というものがいろいろな御縁を通じまして、私には少しづつ身にしみるようになって参りました。

そうして「教行信証」の全体を大観してみますというところ、やはりこれは非常な、驚くべき御著述である。晩年の著述として、あんなに一切経から抜書きして、それをちゃんと分類して、御自分のお言葉をずつとつけておいでになる。こんなことは、普通の頭脳で出来るものじゃない。徳川時代に、華嚴宗の学者だそうでありませう。鳳潭は「教行信証」を読んで、これは気違いの書いたものじゃないか、サツパリ分らんといったことを書いておられます。実際読み方次第やサツパリ分りませう。近角先生は「教行信証」といふ書物は、むつかしいと思えば、どれだけでもむつかしくなる。大事なところを大観していけば、非常によく分るものである、と仰つしやつたことを、今に記憶しておりますが、実際そのようであります。非常な、驚くべき優れた著述なのであります。それを晩年になってお書きになつ

やなかりうかなどと、批判的に考えた、まことに傲慢な話であります。ところがだんだん年をとって参りまして、権藤さん、あの方から承つたことですが、聖人の御和讃を、そんな世間普通の文芸というような眼で見るとは間違いであります。それじゃ御和讃というものはどういふものであるか、それは或る一定の調子に合せて、口誦むという、何とも云えない響きが続いていくものである、と仰つしやり、また、そう書いておられます。私もそこは、その響きというものには分らんこととあります。これは大無量寿経を拝読しまして、お浄土の莊嚴のところ、実は私自身にはあそこが一番大経のうちでは分り難いところでありませうけれども、あの浄土の莊嚴という中のお浄土の音楽のところが、どこどころにもちらちらと書かれてあります。そうすると、お浄土の音楽はどういふものであろうか、こういうことなんかも、考えてみるのであります。そうすると、この世の娑婆世界と違って、なんともいえない、人の心を限りなく静めていく、その音楽を聞くと、私共の煩惱に満ちた、煩惱に沸き立っているようなものでも、心が静まっていく、そういうものがお浄土の音楽らしい。ところが聖人は大経を一身に味つておいでなるのであります。そうすると、聖人の晩年になるほどお浄土の音楽というものが、直き直きに聞えるようになった、こういうことを私、この三年ばかり

り考えているものであります。どうも聖人はお浄土の音楽というものを、心の奥において、直き直き聞いておいでになる。これは私共もそういうふうになればいいのであります。が、なかなかそうもいきません。

この世の中の音楽に例えて申しますれば、西洋音楽なんかは私分りません。しかし、西洋音楽の中でも、私どもの心を静めるような音楽がたまにあります。日本の音楽の中にはそれがむしろ多いのであります。心を静めるような音楽の方が多いかもしれません。ベートベンという、ああいう大作曲家のもので、これも私は実はわからんのであります。第五シンフホニーというのは分るようには思っております。その第二楽章と申しますが、あの辺りの部分は、なんも云えず私なら私なりに、心が慰められ、静められる、そういう感じのところがあります。皆さんもこういう感じのお方がおいでになりますのであります。

ああいうところから考えて参りますというと、お浄土の音楽というものは、何よりもはるかに我々の心を静める音楽である。それを聖人は晩年になって深く感じ、そのお浄土の音楽に合せて御述作になったのが御和讃であります。とくにあの浄土和讃なんか、聖人はお浄土の音楽をお聞きになって、お述作になったものであろう、こういう感じがいたしますのであります。そして高僧和讃なんかにも、い

リスト教の讚美歌にはなさそうに思うのであります。それは世界に拡める心持の歌であります。それは戦闘をやるぞという調子じゃありません。それこそ聖人の心持がそこに響いているのであります。自分が伝導をやるぞ、という顔をしない。しかし、いつの間にか世の中にしみ込んで行く、こういう趣きを感じます。御和讃の全体がやはりそういう感じのものであります。

聖人が御和讃を口誦んでおいでになりますと、確かに浄土の音楽の調子というものが、そこにあったに違いない、それが忘れられている。私共が直接その響きというものを聞くことができないのは残念でありますけれども、私どもでもこの浄土の音楽ということを中心に、そして御和讃の、そんな響きのところに心を入れて参りましたならば、それがもう少し長生をしたならば、もう少し分るようになるのじゃないか、とにかく聖人の御和讃というものはこういうもので、こういうような響きというものをこの世に響かせて、そしてこの世ならぬ歌を歌うておいでになった、それは晩年の聖人である。こんな感じであります。

六、和讃のこと

御和讃のことは、もう一つは「愚禿悲歎述懐和讃」であります。その御心持が響くのであります。「浄土真宗に帰すれども、真実の心はありがたし」というあのお言葉であり

ろいろ感ずるところがありますが、「正像末和讃」、この和讃が私なんか感ずるところが一番多い。末法の世に生れてきた。「釈迦如来かくれましまして、二千年年になりたまう、正像の二時はをわりにき、如来の遺弟悲泣せよ」とお歌いになっていきます。ああいう言葉で始まっている「正像末和讃」というものが、身にしみて参ります。いまの浄土の音楽に合うというのは、あれは一首が四句になっていきます。

もう二句加えて、六句ずつ浄土の音楽に合せて歌うようになっていたものらしい。その権藤さん自身も、聖人が御調子をとっておいでになったメロデー、その調子というものは、残念ながら分らんけれども、どうも六句ずつ繰返して、その調子をとっておいでになったに違いない、こういうわけるのであります。成程そうもあろうか、そういうことであると思っております。この御和讃が本當の音楽的であると、この世の音楽という意味の音楽でなく、お浄土の音楽であるという意味の音楽であると、こういうことを感じますのであります。

皆さんは始終讚仏歌をお歌いになりますようであります。讚美歌とどういうふうに違いかと考えさせられるのであります。私はキリスト教の讚美歌も、仏教の讚仏歌も、そう沢山知っております。けれども、例えば今お歌いになりました「真宗々歌」の響きというものは、どうしてもキ

ます。しんみり私に響いて参ります。ところが、いろいろ考えて参りますうちに、こんなことを考えるようになりまして、それがどうでありますか。一体昔からの精神的偉人というもの、その青年の心を老年に至るまで失わないでいる、そんなのが精神的偉人である。西洋にもその例はありますが、聖人の場合は、その著しい例であると思っております。この述懐和讃が、その何よりの証拠になります。八十何歳にお成りになった聖人が、純真な青年が感ずるようなことを感じておいでになります。と申しますのは、私共は年齢が進んで参りますと、だんだん厚かましくなります。若い時には、これは悪いことをしたと、心から感じたことでも三十、五十、六十になると、なにあんなことは当り前じゃ、というふうには厚かましくなりまして、自分の悪いことを感じなくなりましてあります。そうした自分を省みながらこの御和讃を拝読しますと、八十何歳の老人が、心は蛇蝎の如くなりと感じておいでになる。私どもは六十を越えたから、そろそろ心が立派になりそうなのだと考えている。なりはしません、そんなことを考えます。聖人は八十何歳で「こころは蛇蝎のごとくなり、修善も雑毒なるゆえに」そんなことをいうておいでになる。それは御自身の、御心中を披瀝されて、和讃として歌ってある。これは非常なこ

つまり青年性、純真さというものを、八十何歳まで持ち続けておいでになる。それだから聖人は限りもなく道を求めておいでになったのであります。

もう一つは、聖徳太子に対しての、聖人のお感じてであります。「皇太子聖徳和讃」あの十一首を拝読いたしますと聖人は太子さまを、父の如く、母の如くに仰いでおられます。これは聖人が小さい時に御両親に別れておられますから、この父、母という問題は、やはり聖人にとっては、一生涯を通じての深い問題になっておいでになると思っております。そして光明の母、名号の父という、ああいうお言葉になっておりますように、純粹の父親の味わいというものは呼びかけ声で、純粹の母親の味わいというものは、自分を照らし、温めるところの味わいである、こういうことを言っておいでのなる、非常に深い、いいことという感じがしておりますのであります。

そこで、その御心持、今度は歴史の上で、今日の史学者が研究されるような聖徳太子さまじゃなく、平安時代、伝説として伝わっておりますところの、磯長の聖徳太子廟に伝わっております太子さまとの心の関係が深くなっております。どうして太子さまを父親と呼び、母親

と、私はこういうことを聞くことがあります。真宗では弥陀一仏というんだから、真宗の信者になったら神棚も祭らない、無論他の仏菩薩を祭ったりしない、神棚なんかどこかえやってみよう、ということ、聞いたことがあります。そんなのは真宗の信者として本当の態度であるかということについて、私若い頃から疑問を持っておりますのであります。そうすると聖人の御手紙の阿弥陀仏以外の仏様を軽んじたり、その他の天津神、国津神、そういう神々を侮つたりすることは決してあるまじきことである、あつてならぬことである、それというのも、自分に今のような信心が開けるようになったのは、神々の御導きのお蔭でありますから、よろずの仏菩薩方、天神地祇は、自分にとって大事な方々である、その御恩を忘れてはならない、それを軽んずるといふことはもつての外のことである、という御手紙は御存じの通りであります。これが私の若い時から非常に感じておりますことでもあります。

晩年になるほど聖人は非常に心が広くなっておいでになる。若い時は存外そうでなかったかもしれません。一生懸命で叡山で修業しておいでのなる頃はそうでなくても、晩年には広々とした御心持になられたのであります。これは非常に尊いことでありまして、私なんかも身にうけて参りたいと、若い頃から考えております。とは申しながら狭い心がありまして、なかなかよく参りませんけれど、晩年の

と呼びたくなるというところまでいっておいでになる。それはまた非常に聖人の晩年の純なお心持の現われであると思ひます。

実際日本の仏教の上では太子さまは大事なお方であつて、どなたも大事にあがめることは勿論であります。聖人ほど心から父の如く、母のごとくといつて太子さまを仰ぎ親しんでおいでになる方は、他にないだろうと思ひます。そういうところに、晩年の聖人と申しますか、実に父上、母上ということ、深い心の問題として、それを太子の御上にまで及ぼしておいでのなる。これが晩年の聖人の赤子の心、赤ん坊のような純な心の現われである。だから聖人は一面から云えば、非常に思想的に深くなつておいでになりました、一方からいえば、純真な赤ん坊になつていられる。あれは尊いことであると思ひます。

七、心の広さ

もう一つ、晩年の聖人について、私の非常に感じますことは、聖人の晩年の御手紙を読んで、私も若い時から感じておりますことですが、聖人の「末灯鈔」とか「御消息集」とかに残されてあります御手紙を読んでみますと、聖人は晩年になるほど御心持が広々となつておいでになるのであります。これは非常に尊いことだと思ひます。どうかする

聖人にそういうことを感じるのであります。

もう一つは、笠間の御同行にお答えになつたという、念仏者の疑いに対する聖人のお真筆が残っておりますが、それによりまして、この本願念仏を信じた上は、他のいろいろな修行をしている人を侮つてはならない。またこの念仏を憎む人をも、憎みそしめるべからず。自分がお念仏を信ずる、それをいろいろ人が憎んだり、悪く言つたりする、それに対して自分がムキになつて相手を憎んだり、そつたりしては決してならん。そういう人があつたならば、あわれみをなすべし、あわれみの心持を持つのが本当だ。これは常に聖人が仰つしやつたことであり、その意味のことを御手紙にお書きになつております。

ここまですべていけると、この聖人の御心持は、世界に拡がり、天地に満ちるのであります。私なんかも何年生きていられるか分りませんが、聖人の広々とした、そして絶対平和、この社会は鬭争となつておりますが、聖人のこの御心持を身にうけて、晩年の聖人の広々とした心持を、少しばかりでもわが身に受け、そういう心持を味わうようになりたいというのが、私の念願であります。

晩年の聖人のことにつきましては、まだ申し上げることがないじゃありませんけれども、これだけにいたします。

御一代記聞書抄 (続・一五)

井上善右門

蓮如上人仰せられ候「宿善めでたし」といふはわろし御一流には「宿善有り難し」と申すがよく候ふ由仰せられ候。(第二二三条)

一

この人生は不思議なところであります。従つてこの人生を如何に考えるかについて、古来いろいろな説が立てられてきました。その一つは自由意志論で、結局人生はその人の決意と実践次第によるものとの考えであります。しかし人生はなかなかそうはゆかない、向うから現われてくる抗し難い出来事というものがある。それによつて左右されざるを得ないというのが、いわゆる運命論でありまして、この思想は洋の東西にわたつて古いものです。ギリシャ神話にも運命を操る三人の女神のある事は人の知るところです。ところが運命というのはなを外部から働きかけてくる性質のもので、さらにこれが一転すると、宿命論となり

ます。宿命論とは人間が生れた途端に、その生涯は決定されていくという考えです。いうならば人の一生のレールが生れたときから定まっています、その軌道の上をたどりゆくより外に道はないという人生観です。インドでは宿作外道というのがこれに当ります。この人生に処して重々の避け難い出来事に襲れる経験に遇つと、宿命論をいさぐような心に駆られる事も、十分に察しられるところですが。しかし宿命ならそれより外に為す術もないのですから、自己の行為に責任もなく、努力ということも全く無意味になり終らざるを得ません。人生とはそんな処でありましょうか。

これに対し、仏教の説くところは前三者の何れでもなく、宿命論であります。宿命とは宿世(過去世)の業の報いを受けざるを得ない現実を指すのです。業というのは身口意の三業が生命に刻み込まれ(業種子)、それがやがて結果を引き起すところの潜勢力となるのです。ところがその引き起される果報はある状態でありますから、その状態が我々

にとつて、好しくても好しくなくても共に無記(善とも悪ともいへぬもの)であるという原則があります。富める家に生れるのは好ましい事ですが、それが縁となつて怠惰放逸な人間となることもある。貧しい家に生れたがため刻苦勉勵の人ともなる。畢竟、果報としての貧富は無記ですから、如何様の増上縁にもなるという事です。従つて一般に「善因善果、悪因悪果」といわれるのは因の善悪と、果の善悪の意味が違つてありまして、厳密には「善因樂果、悪因苦果」とでも言われるべきものです。

二

かくて業の果報は、次の善悪縁となるものですが、縁を欠いては因は発動することが出来ません。歎異抄に聖人が「たとえば人千人殺してんや」と仰せられている、唯円房はただ謹んで聖人の仰せを領状申しているのですから、仰に従つて千人殺そうと自分の意志で思い立つても「この身の器量では殺しつべしとおぼえず候」とお答をするより外なかつたのです。これを受けて聖人が「これにて知るべし、何事も心にまかせたることならば、往生のため千人殺せといわんにすなはち殺すべし、然れども一人にても殺すべき業縁なきによりて害せざるなり；また害せじと思ふとも百人千人を殺すこともあるべし」と申されているのは宿命の動かすことの出来ない事実を指適されているお言葉です。

歎異抄の第十三章をよく問題にし、宿作外道と異ならぬではないかと質疑されることがあります。「兎毛羊毛の端にいる塵ばかりも(塵ほどの小さい事でも)造る罪の宿業にあらずということなし」とあるのは、業縁にかかわらぬものは一つもないとの意を述べられたものと拝読されます。決して宿作外道の所説と同ずべきものではありません。であればこそ同章にも「業あればとて毒をこのむべからず」と邪執のいましめが出ています。ただし我々は宿業の果たる縁に圧倒されて、純粹の善心を起すことが出来ないのです。善き心を起したと思ふ途端に自からの業縁に汚されるのです。だから聖道門の人々は永遠の努力を頼みの繩として宿業の縁を断ち切ろうと励むのです。これは雄々しい心根でありますが、果して成就の暁に到達しうるか否か知る由もありません。

宿業の果であるこの身の力にたよるのではなく、法界に響流する如来の御名を領受して、真如一実の功德を頂戴するところに、業縁のきずなを断じていただく道が与えられているのです。成唯識論には「浄法界より等流する正法の聞薰習」という尊い言葉があります。高らかな真実がすでにこの私を待ちかまえているのです。どうして業果の自力に頼っておりましょう。

聞書の本条に「宿善めでたしというはわろし」とありますが、その意はめでたしとは愛で好みたしとの意味で吉事を祝する辞でありますから、従って過去の宿善を顧りみて愛でるのですから、己れの善根を自から愛でよろこぶ意となりません。ところが先にも述べるように、自己の現実を内観するとき、そのような純な善根のよろこびを自覚することとはできません。しかも不思議にも此の身がいま本願の眞実に値遇しえていることを思うと、まことに有り難きことが現にいま有り得ていることに感動します。それは久遠の古より、仏の善巧方便の御催しをたまわつて来たればこそ、難値の本願に今遇いえているというよろこびを感じずにはおられません。

ですから「宿善めでたし」とはこの私にはふさわしからぬ、当をえぬ言葉であり、ただただ「宿善有り難し」と仏の御催しを謝する外にないことをば、蓮如上人御自身の体験から述べられたお言葉であると拝されます。

己が宿業を内観し自覚するところに、善に誇らず悪にひるまない心が確立されてきます。わが宿善というならば、善き事を宿世に行うた果報であるということになりますから、自から高しと自負する気持ちをいだかざるを得ません。また悪に沈むと愈々己れを責める卑下の極、絶対絶命の思

凡骨日誌抄(1)

—— 新年を迎えて ——

あけましてお芽でとうございます。本年も何卒よろしく
お願い申しあげます。

かく申しまして、ペンを手にしている只今は、旧年十一月の末、お東の報恩講が、まことにめでたく終った日の午後であります。わたしも本年は参らせていただき、御影堂のご仏前にひざまずいて、南無阿弥陀仏と合掌いたしましたこととございます。

その報恩講の最中、私ども夫婦、広島法正寺さんの報恩講法要に招かれて西下。そしてその翌朝、久々に藤秀フジヒデ老先生をお訪ね出来たことは嬉しいことでありました。

書物にいつぱい囲かこまれた先生の書齋で、奥さまの心をこめていれてくださったお茶をいただき乍ら、先生の法味ゆたかなお話を承る。金沢の四高時代に西田幾多郎先生から哲学の講義をきかれたこと、広島時代の暉峻康範師や福島政雄・白井成允両先生のお噂さ話、それに原爆の日のこと

いに墮せざるを得ないでしょう。宿業の自覚はよくこの両端から私を救うて無上の本願を仰がしめるものです。宿業は人生の理論から来る自覚ではなく、眞実にこの身が救われる事実にもとづく自覚であると私にはいただかれるのであります。

(昭和五五、十二、一日)

瓶中の影

昔、長者があつた。新に婦を迎え、甚だ敬愛した。或日婦に命じて、厨の中にある葡萄酒を持って来さそうとした婦が行つて瓶を開けて見ると、そこに自分の影が映つて

いるのを見て、それが自影と気づかず、そこに女人のあると思ひこみ、大いに怒り、夫にその非を責めた。

夫はまた厨に入つて瓶を開いて見ると、そこに己の影を見出し、かえつてその婦を怒り、そこに男子を隠すと疑い、互に自分の見る所を實として、鬭争し続けた。

そこに一人の道人があつて、その影にすぎぬことを知り、夫婦を呼んで「われ瓶中の人を出さん」とて、石をもつて瓶を破つて実でないことを知らせた。

西元宗助

など。

先生はおん年、実に九十五才。しかしまだ背筋がシャンとしておられ、お言葉は私よりも明晰なぐらい。お顔の髭も奇麗にそつておられて、身だしなみのよくおありのこと、家妻はあとで、感歎することしきりでありました。先生は午後、ご近所のお寺の報恩講のご法話をなされるのと、そのお元氣なことを、ひそかに驚き喜ぶ。

先生お住いの、徳応寺の離れの小庵を辞去して、しばらくして振り返ってみると、老先生ご夫妻がまだ立ちつくして見送つていてくださったのには、恐縮。まことに仏さまから拝まれている我が身であることを、如実にお知らせいたしたいようなこととありました。

さて今年、二度目の奉職先きの大学を、いよいよこの三月、名実ともに退職することになりました。しかし決して閑暇一楽になれるわけではございません。拝読したい書

物は書棚にずらりと並んで、私を待ちかまえています。是非とも本年中にまとめて刊行したいものもあります。それに講話のご依頼にも応じたいし、また身辺の整理もしたいし、結講忙しいようでありませう。

そのためには、なんとといっても健康が大事。私はまず静坐して姿勢をただし、丹田に氣息を充たして、仕事に打ち込みたいと思うことです。

これ、年頭にあたっての覚悟、皆さまのいっそうのご指導と御加護を仰ぐ次第でございます。

最後に、榎本榮一さんの詩集『群生海』から、わたしの好きな詩、一篇を左にかかげさせていただきます。

あ る く

私を見ていてくださる

人があり

私を照らしてくださる

人があるのです

私は、くじけずに

こんにちをあるく

死の宣告を受けて

池山夫人を憶う

始め主治医の末綱さんから胃部の腫瘍を图示せられた時に「しまった、手遅れした」同時に「大丈夫間に合った」と喜ばせて貰ったことは前に述べた、その瞬間に私の頭に飛んできたのが池山夫人である。この方は岡山第六高等学校教授の池山榮吉氏の夫人で、大正六七年頃、胃癌に罹り医師からそれとなしに告げられた時、卒倒せんばかりに驚いたが、成程斯様な哀れな者をお見捨てないお慈悲であったと気づかれると胸がスーと開け、それから結構な念仏の生活を続けられたお方である。このお話は、其頃求道会会館で直接近角先生から承り大変有難く感じ、その後も時々「求道」を取り出しては御縁に会わせて貰って居たが、今度はそれが話でなくて事実その通り私の身に振りかかって来たのであるから「成程そうか、成程そうか」とうなづかせて貰った。

そのうち殊に私の胸を強くついたのは、池山夫人が近角

ゲエテ「語録」

高い所に居る人程、悪魔に誘われ易い。

何でもただ聞いたばかりで知識を得ることは出来ない。或る事について自分で一生懸命に骨を折って見ない人は、ただその事の上の面を知ったばかりで、実は半分も分っていない。

常に自分の時代に捕えられていて、その時代にあるものからばかり栄養を受けて辛抱している者は、畢竟凡庸の才にすぎぬ。

同時代の人を学んだとて何にもならぬ、幾百年経っても少しも価値が落ちずに尊敬されているような著作を残した昔の偉い人を学ぶがよい。天才の人はこうした学びの必要さを知っている。吾人はモリエールを学ぶ、シエクスピヤを学ぶ。然し先ず古代ギリシヤを学ばなければいかぬ。

誤謬は絶えず繰り返して世に行われている。その故に人は飽くことなく真実を繰り返して聞かねばならぬ。

故・安波勲 八

先生から向坊さんのお話を聞かれて非常に楽になられたというお話である。先生が夫人の病中、御見舞の法話会に行かれた時に、夫人の喜びが余りに大きいので、皆の人が「不思議じゃ〜只事で無い〜」とまるで唯し立てて居るような気楽な話になっていたので、今癌で逝こうとする人の心持を汲んでいないのを叱られて「もうあなただけ聞けばよいではないか」というて、当時、撫順炭坑の爆発で一命を拾った向坊さんの話をされた。

向坊さんは日頃から厚信のお方であったが、突然の爆発に遭うて人事不省になった。その時「しまった！」と大声を発したそうである。早速外にはこび出し、酸素吸入をしているうちに、南無阿弥陀仏々々と息を吹きかえして来たそうである。先生がこの話を聞かれた時、あれ程喜んで居る人が南無阿弥陀仏ならとにかく失敗したというて倒れたのはおかしい様な気がした、けれどもよくよく考えて見ると「失敗した」より外この時出ぬ筈である。処がかく

失敗った、残念だと叫んで死ななければならぬその残念さを「さぞ残念だろう、その汝を何処までも見捨てぬぞ」とこのお慈悲が聞える故に、心の中に「有難い！」と、それで死ぬ故、心の中が南無阿弥陀仏、したがって目が醒めた時、南無阿弥陀仏が出たのである。向坊さんは娑婆へ目をあかれたのであるから、娑婆で南無阿弥陀仏となったが、未来へ開かれたら極楽浄土へ南無阿弥陀仏となられるのである。

このお話を聞いて、意外にも夫人が大変喜ばれて「実は先日から腹がひどく痛んで、念仏しようにも出来ないことがある。たとえ念仏が出来ぬとも、お見捨てないお慈悲で必ず参らせて下さるとは聞いているけれど、今この有様ではいよいよの時どんな有様で引きとらせて貰えるか、皆なの人から大往生を遂げるものと思われていて、自分は構わぬが、人様に誤解を与えはせぬかと気になって居た。処が今のお話で、いよいよの時、失敗った、の一言しかないのが本当と承って、初めて安心した。私がたとえどの様な有様で終ろうと、たとえ失敗ったで亡くなろうと、皆が案じることはないことが分って大変らくになった」と。

私は池山夫人がこの話をされたことが大変有難かった。私自身、いよいよ胃癌と診断され、手遅れと宣告されても、この何とも仕様の無い奴をお見捨てないお慈悲に腹ふくら

せて、池山夫人のように歓喜に満ちた日暮しをさせて貰えることはまことに仕合せである。同時に、いくら喜ぶと云うても、いくら信仰に徹底していても、これからさき病気が進んで来て、痛みがひどい時はお念仏も出なくなり、またいよいよ臨終となれば「失敗った！」より外の無い私である。この「失敗った！」より外ない私をお見捨てなきお慈悲のみが、私の生命であり、力である。縁の催しではこれからさきどんな見苦しい状態をするかもしれぬ、臨終には、ジタバタするかも知れんが、そんな問題までも片付けて貰っている。

現在の問題も、臨終の問題も、未来の問題も一切解決させられて、一点のくもりもない、誠に有難いことである。

白杵祖山師吊歌

われやさき人やさきなる世ながらに変わぬ慈悲にすくはれてゆく

身はたとひあしたの露と消えぬともころろは永久に華のうてなに

いかにせんすべもなき身をひとすじにとほるみのりにつられぬかれぬる

ゆく君をおくるころろもあはれなれ我やさきなる身ともしらずに

念仏詩抄

悪ければこそ

香師おおせに
参りながら

これでよいくと
墮(お)つるあり

これでよければ
ご本願は建てぬ
悪ければこそ
大悲大願

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

香師—香樹院徳龍師

お助けはただ

木村無相

香師おおせに
信じぶり称えぶりの

自力の料簡(りょうけん)を
先きに立てるゆえ
大切なる御廻向の

南無阿弥陀仏が
かたわらになる

信じぶり

称えぶりには

用事なし

お助けはただ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

今のイノチは

香師おおせに
“かかる不定のイノチをかかえ
生きのびて聞く仏法の
尊さを知らぬ——”

今のイノチは
如来のイノチ
生きのびさせて
聞かしたもう

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

それゆえ成就して

香師おおせに

“三つ子に大石持てというは
親の無理——
マコト無きものに
マコトになれとは
おおせられぬ
それゆえ成就して
与えたまう
他力の大信心——”

それゆえ成就して
与えたまう
他力の信心
六字の名号——

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

その証拠(しょうこ)が

香師おおせに
“管(くだ)の中から
天をのぞく如くに
仏の御慈悲を小さく
思っておる
たといこの身は仏に
そむき
地獄に堕ちるとも
御慈悲の天を
はなることはならぬ”
その証拠が
この鬼めが
今、お聞かせを
いただいている——

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

聞こえぬわけ

香師おおせに
“一文不知の屁入道は
すてる智慧がなきゆえに
ようもなく信ぜらるる——”
智慧あるものは
智慧が邪魔して
如来のおおせが
そのまま聞こえぬ

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ



心に刻まれた法語

花田 正夫

年頭にあたり私自身がいつも心に深く刻まれております御法語をあげて、御高覧いただきたいと願ひ、次に誌しました。

一、道綽禪師『安樂集』

曇鸞法師、康存の日、常に浄土の行を修し給う。世俗の君子来りて法師を呵して曰く。十方仏国みな浄土なり。法師何ぞ独り意を西に注がるや、あに偏見の生にあらずやと。

法師対えて曰く。吾すでに凡夫にして智慧浅短なり。未だ地位（菩薩のくらい）に入らざれば、十方を均しく念ずるあたわず（仏これをことに憐みたまいて）牛を引くに槽檻（かいはおけ）に草を置きて、恒に心をそこに注がしめるが如し、あに縦放にしては全く帰する所を得べからざるが故にと。

難する者紛々たりといえども、法師ひとり決し給う。

二、全書上

劫を経歴して苦をうくること窮りなかるべし、かくの如きの悪人、命終の時、善知識の種々に安慰して、ために妙法を説いて教えて仏を念せしむるに遇えり。かの人苦にせめられて仏を念するにいとまあらず。善友告げて曰く、汝もし念すること能わずんば、まさに無量寿仏と称すべし。かくの如く心をいたして声をして絶たざらしめ、十念を具足して南無阿弥陀仏と称す。仏名を称するが故に念々の中に八十億劫の生死の罪を除き、命終の後に金蓮花のなおい日輪のごとく、その人の前に住するを見て、一念の頃のごとくに即ち極樂世界に往生することを得るなり」と。

この文われら來世の誠証とするに足れり。（全上書）

僧都臨終に、傍なる人をして觀無量壽經、下品の文を読ましめ、頭北面西、右脇に臥して、念珠をとりて称名念仏して禪定に入るが如くに息たえたまえり。春秋七十六歳。

九品（上三、中三、下三）の中、此品（下品）最も要なり、すこぶる我等が分に相当せり。（觀經釈、法然上人書）

四、法然上人の廻心

或時、上人仰せられて曰く。

出離の志ふかりしあいだ、諸の教法を信じて、諸の行業を修す。凡そ仏教多しと云えども、所詮は戒・定・慧の

『智度論』に云うが如し。譬えば、二人俱に父母眷屬の深淵に没在するを見て、一人は直ちに往きて力を尽くしてこれを救うに、力およばざればざれば、あい俱に没す、一人は遙かに走って一舟船に赴き、乗り来りて救済するに、ならびに難を出するが如し。菩薩もまたしかなり。若し菩提心を發さざる時は、生死に流転すること衆生と別なし。但しすでに菩提心を發す時は、先ず浄土に往生せんと願じて、大悲の船を取りて、無碍の舟才を得て、生死の海に入りて衆生を濟運するなり、と。

三、下品の往生

上品の人、階位たとい深くとも、下品の三生（上・中・下）、あに我等が分に非ずや。（往生要集六、源信僧都書）

そもそも觀無量壽經を案するに云く。「或は衆生ありて五逆十惡を作りて、もろもろの不善を具す。かくの如きの愚人惡業をもつてまさに惡道におち、多

三学をばすぎず。所謂小乘の戒定慧・大乘の戒定慧、顯教と密教の戒定慧なり。

しかるに、わが身は、戒行において戒をもたもたず。禪定において一もこれを得ず。人師釈して尸羅（戒・清淨ならざれば三昧現前せずと云えり。また凡夫の心は、物にしただがいて移り易し、たとえば猿猴の枝をつたうが如し。まことに散乱して、動じ易く、一心しずまり難し。無漏の正智なによりてかおこらんや。もし無漏の智劍なくばいかでか惡業煩惱のきずなをたたんや。惡業煩惱のきずなをたたずんば、何ぞ生死繫縛の身を解脱することを得んや。悲しきかな、悲しきかな。いかがせん。いかがせん。ここに我等如きはすでに戒定慧の三学の器にあらず。この三学のほかに、我が心に相應する法門ありや、我が身に堪えたる修行やあると、よろずの智者にもとめ、諸の學者にとぶらしに、教うるに人もなく、しめす輩もなし。

しかるあいだ歎きく、經藏に入り、悲しみく、聖教に向いて、手ずからみずからひらき見しに、善導和尚の觀經の疏の「一心に弥陀の名号を専念し、行住坐臥、時節の久近を問わず、念々に捨てざれば、是を正定之業と名すく、彼の仏願に順ずるが故に」という文を見得てのち、我等如きの無智の身は、ひとえにこの文を仰ぎ、専らことわりをたのみて、念々不捨の称名を修して、決定往生の業因にそ

なうべし。ただ善導の遺教を信ずるのみにあらず。またあつく弥陀の弘誓に順ぜり。順彼願故の文、ふかく魂にそみ、心にとどめたるなり。

五、立教開宗の真意

法然上人、或時かたりてのたまわく。

われ浄土宗をたつる心は、凡夫の報土に生まるることを示さんがためなり。もし天台によれば、凡夫浄土に生まるることをゆるすに似たれども、浄土を判することあさし。もし法相によれば、浄土を判することふかしといえども、凡夫の往生をゆるさず。諸宗所談、ことなりといえども、すべて、凡夫報土に生まるることをゆるさざる故に、善導の釈義によりて、浄土宗たつるとき、すなわち凡夫報土に生まるることあらわるるなり。

六、上人の御遺跡

法然上人の御臨末の近い日。法蓮房申さく。

古来の先徳みなその遺跡あり。しかるにいま精舎の一字もなし。御入滅後いづくをもて御遺跡とすべきやと。

上人こたえてのたまわく。

跡を一廟にしむれば遺法あまねからず。予が遺跡は諸所に遍満すべし。ゆえいかんとなれば、念仏の興行は愚老一期の勸化なり。されば念仏を修せんところは、貴賤を論ぜず、海人漁人がとまやまでも、皆これ予が遺跡なるべし。

とぞ仰せられける。

七、明遍僧都の念仏

高野の碩学明遍僧都、或時、法然上人所造の選択集を披覽して、この書のおもむきいささか偏執なるころありと思ひて、寝られたる夜の夢に、天王寺の西門に病者数知らずなやみ伏せるを、一人の聖の鉢に粥を容れて、匙をもちて病人の口ごとに入るありけり。誰人にかあらんと問うに、側なる人応えて、法然上人なりと云うと見て覚めぬ。

僧都思わく。我選択集を偏執の文なりと思いつるを、誠めらるる夢なるべし。この上人は機を知り時を知りたる聖にておわしけり。病人の始めには、柑子、橘、梨子、柿などの類を食すれども、後には、それもとどまりぬれば、僅かに重湯を用いて、喉をうるおすばかりにて命を支えたり。かくの如くこの書に一向に念仏をすすめられたるは、これにたがわず。五濁濫漫の世には、仏法の利益次第に減ず。

この頃はあまりにも末代になりて、我等が有様、たとえは重病者の如し。三論・法相の柑子。橘もくわれず、真言・止観の梨子・柿もくわれねば、念仏三味の重湯にて生死を出すべきなりけりとて、たちまちに顕密の諸行をさしおきて、専修念仏の門に入り、その名を空阿弥陀仏とぞ号せられける。

八、遠慶宿縁

たまたま浄信を獲ば、この心顛倒せず、この心虚偽ならず。ここをもつて極悪深重の衆生、大慶喜心を得、もろもろの聖尊の重愛を獲るなり。(信巻・中序)

十二、悲歎述懐

誠に知んぬ、悲しき哉、愚禿鷲、愛欲の広海に沈没し、名利の大山に迷惑して、定聚の数に入ることを喜ばず、真証の証に近づくことを快まず、恥すべし、傷むべし矣。(信巻、末御自釈文)

十三、樹心弘誓仏地

慶しきかな、心を弘誓の仏地に樹て、念を難思の法海に流す。深く如来の矜哀を知りて、まことに師教の恩厚を仰ぐ、慶喜いよいよ至り、至孝いよいよ重し。

これによりて、真宗の要をひろう。唯仏恩の深きことを念じて、人倫のあざけりを恥じず、もしこの書を見聞せんものは、信順を因となし、疑謗を縁となし、信樂を願力にあらわし、妙果を安養にあらわさん。

(化土巻、結語)

噫、弘誓の強縁は多生にも値いがたく、真実の行信は億劫にも獲がたし、たまたま行信を獲ば遠く宿縁を慶べ、もしまたこのたび疑網に覆蔽せられなばかえりてまた曠劫を経歴せん、誠なる哉や、撰取不捨の真言、超世希有の正法、聞思して遲慮することなかれ。(教行信証・総序)

九、名をもつて物を撰し給う

わが弥陀は名をもつて物(衆生)を撰したまう。是をもつて、耳に聞き、口に誦するに、無辺の聖徳、識心に攪入し、永く仏種となりて、頓に億劫の重罪を除き、無上菩提を獲得す。まことに知んぬ、少善根に非ず、これ多功德なり、と。(行巻、元照律師釈文)

十、大悲の願船

しかれば、大悲の願船に乗じて、光明の広海に浮びぬれば、至徳の風静かに、衆禍の波転ず。即ち無明の闇を破し、すみやかに無量光明土に到りて、大般涅槃を証し、普賢の徳にしたがうなり、知るべし。(行巻、御自釈文)

十一、真実の信樂

然るに、常没の凡愚・流転の群生、無上妙果の成し難きにはあらず、真実の信樂まことに獲ることかたし。何をもつての故に、いまし如来の加威力に由るが故に、ひろく大悲広慧の力によるが故なり。



あとがき

謹而新春をお慶び申し上げます。一休禪師は「元旦や冥土の旅の一里塚 芽出度もあり、芽出度もなし」と、京の都人を驚かしたと聞きますが、池山先生は

念仏で先ず過ぎさばや 三ヶ日

歳旦を先ずおとするる 念仏哉

と詠じられましたことを思い出し、例年のようにお念仏を唱和させていただくことであります。

近角先生の「如来の御心」はいつも心うたれることであります。くりかえしお味読下さいますように。

福島先生の「晩年の聖人」は私共の一番うかがいたい聖人のお心事であります。先生の御晩年に書き残して下さいましたものであります。

井上様は「宿善」について詳しくお知らせ下さいました。因縁果を基盤とする仏道にたく宿命論的に間違いやすいことへの警告を頂きました。

慈光 第三十三卷 第十一号 昭和五十六年一月十五日発行（毎月一回・十五日発行）
昭和二十四年七月二十三日 第三種郵便物認可

西元様は、藤老師の御消息を記して下さいありがとうございます。又、本春にいいよ公職を退ぞかれて一筋にお念仏の道に進まれます由、さぞこれからはお忙しいことでありましょう。御健在を祈念申しております。

故安波医師の体験録から一篇を抜き出し、教えをうけました。池山清夫人の実話はいつも私には行く方を照らす燈塔とさせて頂いております。

木村様には一番心配な寒さとなりましたが、和上苑には暖房完備の由、ひとまず安心させて貰っています。

○

私事、昨年は七月から半年間、月一度つづ大阪朝日新聞のカルチャーセンターに「人間を考える」という講座に招かれてまいりましたが、本年は、四月二十日、五月十八日・六月十五日（第三月曜日午後一時―三時）に源信僧都・法然上人・親鸞聖人の教を讃仰したいと思っております。

大阪市北区中之島三丁目二の四、朝日新聞ビル内朝日カルチャーセンター、（電話、代表〇六一二二―一五二二二）に御希望の方は聴講のことお尋ね下さいますように。

△御案内▽

- 毎月第一、第三日曜、午後一時半 一道会例会。一道会館の南隣り、南区駈上町二の八六。鬼頭康彦氏宅
- 市バス、新郊通り一丁目下車、東入ル三筋目、角。
- 地下鉄、新端橋終点下車。
- 教西寺、法話会。昭和区小桜町二丁目四 毎月二十四日、午前・午後。
- 市バス、御器所通り又は北山下下車。
- 地下鉄、御器所通り下車。
- 蓮光寺修道会。毎月七日午後一時半。（但し日曜を除く）尾西市三条板倉 名鉄新一宮駅よりバス、西三条下車。

定 価	半 年	七〇〇円（送共）
	一 年	一四〇〇円（送共）
編 集	・ 発行人	花 田 正 夫
		電話八二二局七〇三七番
印 刷	・ 人	愛知県西加茂郡三好町大字福谷
	・ 部	名古屋市南区駈上町二ノ八八
発 行	・ 所	名古屋市南区駈上町二ノ八八
	・ 社	振替口座 名古屋 一〇四七〇番
	・ 郵便番号	四 五 七